OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本の性教育を巡るジェンダー・フリー・バッシング
Author(s)	横田, 恵子
Citation	臨床哲学. 2006, 7, p. 121-122
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7868
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

付録エッセイ

日本の性教育を巡るジェンダー・フリー・バッシング

横田恵子

90 年代後半の経済・社会状況の閉塞感と連動するように、性教育実践への公権力介入、ジェンダー・フリー思想への露骨な嫌悪感の表明など、気がつけばずいぶんと息苦しい状況が私たちを取り巻くようになりました。自民党のホームページでは「あなたのまわりにある、行き過ぎた性教育の取り組みをお知らせください」と堂々と密告を奨励しています。また、東京都教育委員会が養護学校の性教育実践現場に介入して教材をほとんど没収したのは 2003 年のことでした。さらに保守を自認する言論界では、産経系メディアを中心にジェンダー・フリーの視点に基づく性教育実践に対するヒステリックともいえる嫌悪が堂々と表明されていますし、地方議会とタイアップして中学生への具体的・個別な教育実践が次々とやり玉にあげられています。議会で追及され、メディアで一方的に叩かれたのちに継続不能になった教育実践は少なくありません。また､中学生のために書かれた「ラブ＆ボディＢＯＯＫ」（母子衛生協会発行）という、実に良くできた冊子があるのですが、これも 2003 年に国会議員のバッシングによっていつのまにか焚書扱いにされ、世の中から消えてしまいました。

過去を美化してありもしなかった「理想社会」を作り上げ、そこへの回帰を叫ぶのは、依るべき指針が見えない流動的な時代にありがちなことなのでしょう。そのため、このようなクレイムは「よくありがちなこと」として、保守派・良識派を自認するこれらの稚拙な論理を、ジェンダー・フリーや包括的性教育を推進する側があまり本気で相手にして来なかったという経緯があります。

しかし、稚拙で単純な「言い分」は、それだけに妙に力強くて分かりやすいということもまた一面の事実です。今のように多くの人々が閉塞感や漠とした不安を抱えて日常をやり過ごしている時代に､「若者の乱れた性は、幼気な子どもたちに無理矢理性情報を仕込む一部の大人のせいで作り出される」という理屈は、鬱積した不満のはけ口としてはうってつけです。言い立てる側の人々は､「厭らしいことを企み、世を堕落させる人々に立ち向かう」という正義（？）にワクワクするのでし

ょうか。

性について当事者が多面的な情報を得たのちに自らがそれらを批判的に咀嚼し、自分の有り様を選ぶことを勧める性教育を「包括的性教育」といいます。今、バッシングを受けているのはこの視点に立った性教育実践です。特に中学生に対しての実践が、「寝た子を起こすな」という耳に馴染みやすいスローガンによって阻止されつつあります。それに変わって、一方的に性と性感染症に対する恐怖心を当事者に植え付け、「結婚までの純潔」を説く教育がアメリカ経由で持てはやされるようになったのが 2004 年頃からでした。しかし、人は「知る」ことによって、そして知りえたことを批判的に判断する方法を身につけることによってのみ、本当に生きることが出来るのではないかと思うのですが・・・。